



# 理解し、考え、判断しながら 英語を使う授業

渡邊時夫 Watanabe Tokio

英語を教える場合に、誰もが一度は考える指導法がある。まず、重要な文や構文を何度も繰り返し口ずさんでしっかり記憶させる。やがて記憶できた文の数が増え、英語のいわば貯水池ができる。そうすれば、必要に応じてその貯水池から適切な文を選び出しさえすれば生徒は自由にコミュニケーションができる、という考え方である。例えば、*The news made them happy.* を目標文とすると、substitution, expansion, transformationなどのdrillを通して多様な文を大量に生産し、貯水池を豊かにすることができる。このようにして蓄積された英語の貯水池は、コミュニケーション能力の基礎・基本の重要な一部であると言えよう。ただ、この種のdrillは、機械的な活動になりやすく、大半の時間をこれにあてるような指導は再考しなければならない。

生徒が自ら考え、判断しなければならないような英語の場面を提供し、それぞれの生徒が独自のideasやfeelingsを明確化していくteaching processを確保したいものである。機械的なdrillを重ねて、*The news made them happy.* を体得した生徒に、原爆に関わる次の対話を与えたとしよう。

- A: The atomic bomb killed tens of thousands of people in a moment.
- B: Unbelievable! (1) That makes me sad.
- A: You must know the power of the bomb.
- B: I think (2) peace is important.

下線部(1)に触れることによって、That makes me angry (shocked / sorry / unhappy / mad / surprised)など感情レベルの体験をさせたり、下線部(2)について、自分の思いとぴったりした表現を次のうちから選ばせるなどの活動を日常化したい。(a) war is terrible (b) the atomic bomb is different

from other bombs (c) we must avoid war まずは、これらの英文を生徒に要求することはせず、教師が創作し、生徒にインプットすることが望ましい。そのような活動のあとに、「表現したい気持ち」を発表させたらどうだろう。War makes nobody happy., Weapons make everybody miserable., We must remember the words "No more Hiroshima.", など様々な主張が予測できる。「日本の生徒は、なかなか発言したがらない」ことも事実だが、教室で意味ないことや、言いたくないことを言わされる場面が多くすぎるのではないか。言いたいことを表現する機会を増やすことと、表現力の基礎には理解力という基盤が必要であること、を忘れてはならない。

英語を使う力を習得するためには、話す練習に加えて、たくさんの英語に触れ、考え、理解する機会が豊かに与えられることが必要なのである。生徒は、英語を聞いて理解することの魅力を恒常に体験できるし、1つのメッセージを表すのに多様な発想や表現があることを無意識のうちに学びとることができる。生徒が持っているこのimplicit learningの力を意識的に活用しなければならない。教師の「英語を創造的に使う能力」が求められていると同時に、生徒が啓発され、深く考え、意見を発表したくなるような内容の教材が求められている。新しいNEW CROWNは、まさに、このことに全力を注いできたのである。

## わたなべ ときお

清泉女子学院大学教授。中部地区英語教育学会会長。小学校英語教育学会会長。全国英語教育学会副会長。著書に『英語が使える日本人の育成—MERRIER Approachのすすめ』(三省堂)ほか多数。